

学校給食用木製食器の使用による児童の諸反応（第1報）

—木製食器に対する児童の特性別諸反応—

福田英昭*1・大内 毅*2

はじめに

給食用食器材料について、熱伝導性や安全性または地元産業振興の立場から、木製や陶器製の食器を用いるところがでてきている¹⁻²⁾。特に木製食器を使用した場合、各児童が食器を手で持ち、正しい姿勢で食事をする傾向があるといわれている。これは正しい食事の仕方などの基本的な生活習慣³⁻⁴⁾の教授という教育上の評価の対象としてとらえることができる。1985年に出された「学校施設に木材を使用すること」を主旨とした文部省通知⁵⁾からもわかるように、教育環境における木質材料の効用が認識されてきた今、木製給食用食器を使用することで、児童の基本的な生活習慣がどのように変容していくのかを研究することは、教育環境の見直しの観点からも急務であり重要であると考えられる。

本研究では以上のような観点から、木製食器を使用した場合の児童の特性別諸反応（視覚、触覚、聴覚、臭覚、ストレス関連、安全性関連、教育効果関連、等）を明らかにし、木製食器が児童にどのような影響を与えるのかを調査したので報告する。

1. 研究方法

研究は、琉球大学附属小学校6年1組の39名（男子20名、女子19名）を対象とした。木製食器の使用期間は、3カ月間（1991年10月～12月）とし、ビデオカメラと写真撮影による給食観察を、その前後1カ月を含めて計5カ月間（1991年9月～1992年1月）行った。

木製食器に対する児童の感覚および意識を調べるために、評定尺度法と自由記述法を併用したアンケート調査を次に示すように計4回行った。

（第1回）従来のメラミン製食器を使用している1991年9月

（第2回）木製食器の使用開始直後（使用1週間後）の1991年10月

（第3回）木製食器の使用終了直前（使用3カ月後）の1991年12月

（第4回）再び従来のメラミン製食器を使用し始めた1992年1月

このアンケート調査により、木製食器に対する児童の特性別諸反応（視覚、触覚、聴覚、臭覚、ストレス関連、安全性関連、教育効果関連、等）を調査した。

なお、使用した食器のメラミン製のものを写真1、木製のものを写真2に示す。

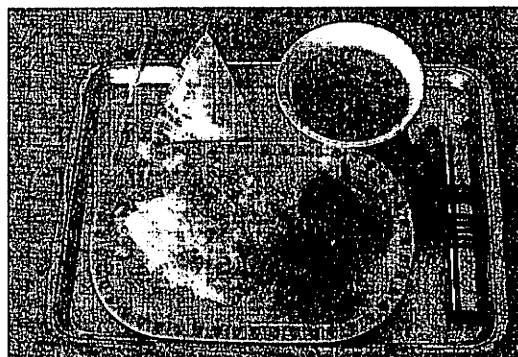


写真1 メラミン製食器
（ただし、トレイはアルマイト製）



写真2 木製食器

2. 結果と考察

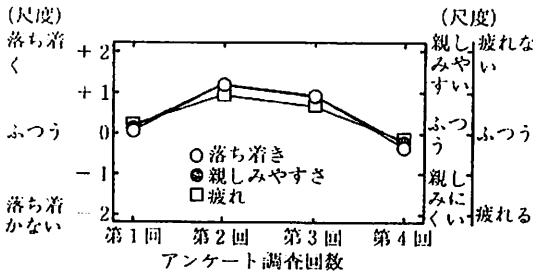
食器に対する計4回の児童の感覚・意識の調査では、相反する意味の形容詞を対にした評定尺度法をもとに分析を行った。この場合、「0」が中央の感覚・意識を表し、「+2」および「-2」が対立する概念の最大値をそれぞれ表している。本研究では5段階の評定で、

*1琉球大学教育学部

*2琉球大学大学院

2.5 ストレス関連特性

人間には順応する能力があり、現実的なことが順応水準から大きくずれることでストレスが発生する。ここでは食器に対する「落ち着き」、「親しみ」、「疲れ」についての感覚調査の結果を第3図に示す。いずれも

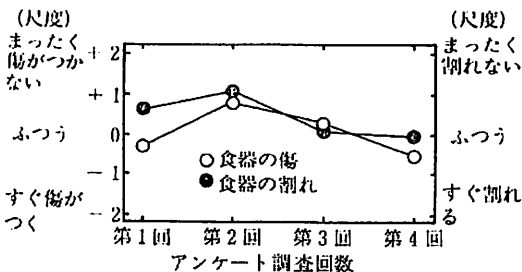


第3図 ストレス関連特性変化

第2回と第3回の尺度がプラスの領域内であり、また木の劣化値も小さいことから、木製食器の使用によるストレスの発生は特に認められない。だが、第3回の木製食器の使用直後に「少し重くて使いにくい」という意見があり、また、第4回でメラミン製食器を再び使用するようになったとき、「軽くて使いやすくなった」、「1年から使っているので使いやすい」といった意見もみられ、新しいものの不慣れな使用からくるストレスの発生が一部にあったことが予想される。

2.6 安全性関連特性

食器の耐久性に関する認識の変化を、第4図に示す。

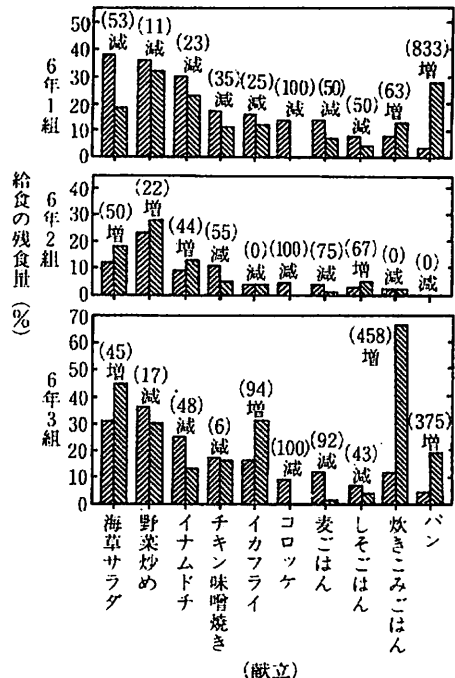


第4図 安全性関連特性変化 (食器の耐久性)

傷がつくことや割れるという木材の材料的マイナスイ点に対する認識は、第2回では特に表れていない。だが、割れに対してはその木の劣化値が大きく、実際の食器使用時に数枚の割れた木製食器を目にしてそのような認識変化が表れたものと思われる。

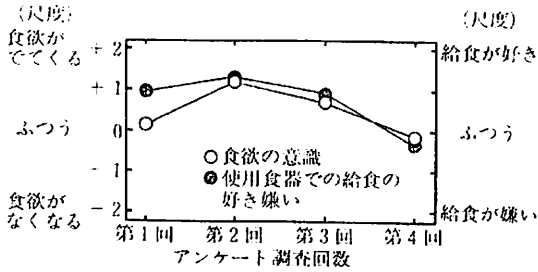
2.7 教育効果関連特性

使用した食器の違いによる残食量の変化を、メラミン製食器を使用している1991年5月13日～5月17日と、木製食器を使用している同年11月11日～11月15日の、献立内容がほぼ同じに設定された期間において検討する。木製食器を使用した6年1組の結果と、同じ期間に常にメラミン製食器を使用していた6年2組と3組の結果を示したものが第5図である。献立内容の多く



第5図 教育効果関連特性変化 (残食量の変化)

で、木製食器使用による残食量の減少がみられ、他のクラスよりも顕著な残食量の減少がみられる。また、第6図に示す食欲についての意識の変化においても、木製食器の時に「食欲がでてくる」という回答が多いことから、木製食器を使用することで残食量を減少させることが児童の意識のうえでも確認できたと考えられる。なお、使用している食器での給食の好き嫌いの意識変化を調べると同図に示すような結果となり、木製の場合は「好き」という意識が常に強いが、メラミン製に再び戻ったときの見劣り値は大きくなっている。



第6図 教育効果関連特性変化(意識の変化)

おわりに

これまでの結果から木製食器の使用による児童の特性別諸反応をまとめると、第4表のようになる⁸⁾。教育環境として木製食器を使用する際には、視覚・触覚・聴覚・臭覚特性だけでなく、ストレス関連・安全性・教育効果等の特性も大切な評価項目となる。この表が

第4表 木製食器に対する特性別諸反応

特性	木製食器のプラス評価	木製食器のマイナス評価
視覚特性	自然な、柔らかない、かっこいい、色がいい、模様がいい、暖かい、明るい、和風、上品	
触覚特性	暖かい、柔らかない、手になじむ、つるつる、さらさら、軽い、口ざわりが優しい、食べ物が熱いまま、食器外側を熱く感じない	重い、つるつるしてつかみにくい
聴覚特性	音を感じない、心地よい音	
臭覚特性	木の臭いが好き	木の臭いが嫌い
ストレス関連特性	落ち着く、親しみがある、疲れにくい、気持ちがいい	不慣れで使いにくい、重くて使いにくい
安全性関連特性	食器外側が熱くない	傷がつきやすい、割れやすい
教育効果関連特性	食欲が出る、残食量が減る	片付けにくい、食器を置く場所が広く必要

らもわかるように、児童はこれら特性のすべてにプラス評価をしており、特に、視覚・聴覚についてはマイナスの評価がなされていないことは注目に値する。

本研究にご協力いただいた琉球大学附属小学校6年1組の児童の皆さん、担任の山田総先生、ならびに同校栄養士の森山尚子先生に心から感謝いたします。

なお、本研究の一部は平成3年度文部省科学研究費補助金、奨励研究A(課題番号03760114)の援助を受けている。

文 献

- 1) 日本木材学会編：もくざいと教育，海青社，17-19 (1991)
- 2) 大迫靖雄：木材と学校教育(木質環境の教育効果)，日刊木材新聞，1990.10.3.
- 3) 片峰和子，喜島健夫：学校給食全書，全国学校給食協会，6-8，68-73 (1972)
- 4) 茂木専枝：学校給食の新知識，第一法規，27-31 (1980)
- 5) 文部省大臣官房文教施設部長通知，1985.8.20.
- 6) 教育強化委員会第一分科会：木材と学校教育(子供の発達と木材のかかわり方)，日本木材学会，26 (1990)
- 7) 大迫靖雄：学校教育における教育環境のあり方，ウッドエイジ，北海道林産技術普及協会，6-7(1988)
- 8) 文献1) p.13の表をもとに作成した。

(1992. 6. 8受理)